

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

DECEMBER 20, 2012 No. 94



若鮎祭特集・夏の課外活動

第38回 「若鮎祭」を終えて

第64回 西日本医科学学生総合体育大会

- 新任教員紹介
- 海外自主研修
- ヨット部による追悼慰霊式



SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

SETA DAYORI

DECEMBER 20, 2012

勢多だより

DECEMBER 20, 2012

C O N T E N T S



メインテーマ：「若鮎祭特集・夏の課外活動」

トピックス

- 01 | 第38回「若鮎祭」を終えて 実行委員長 医学科第4学年 岡 野 翔
- 03 | 「若鮎祭」実行委員の感想
- 06 | 平成24年度学生表彰
- 07 | 第64回 西日本医科学生総合体育大会

図書館からのお知らせ

- 08 | Library Book Bazaarを開催しました！

キャンパスライフ

- 10 | スチューデントドクター制度について
- 12 | 海外自主研修
 - 自主研修を終えて 医学科第4学年 真 田 悠 希
 - 海外自主研修 in Kenya 医学科第4学年 谷 村 真 依
 - アメリカでの自主研修で学んだこと 医学科第4学年 藤 原 慎 二
 - ミシガン州立大学連合との交流協定に基づく研修に参加して
看護学科第4学年 市 川 瑞 希
- 20 | 平成24年度滋賀医科大学奨学金奨学生の決定
- 22 | ヨット部による追悼慰霊式
 - 2012年 嶋岡さん追悼慰霊式
 - 医学科第3学年 ヨット部主将 九 住 龍 介

新任教員紹介

- 23 | 生命科学講座（生物学） 教 授 平 田 多佳子
- 24 | 解剖学講座（生体機能形態学） 准教授 岡 野 純 子
- 25 | 医療文化学講座（哲学） 教 授 室 寺 義 仁

国立病院機構 滋賀病院だより

- 26 | 滋賀病院の中核診療科として
国立病院機構滋賀病院 呼吸器外科医長 尾 崎 良 智

インフォメーション

- 28 | 平成24年度第1回学位授与式
- 29 | 平成24年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに
平成24年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式
- 32 | 第38回 解剖体慰霊式

編集後記（宮松編集長）

トピックス

第38回「若鮎祭」を終えて

第38回若鮎祭実行委員会委員長
医学科第4学年
岡野 翔



若鮎祭が終わり平然とした日常を取り戻そうと努めている校内や学生にも依然として祭りの匂いを漂わせている中、まだ私は学園祭の熱を全く拭うことができません。

ちょうど、1年前、我々の1つ上の先輩方が若鮎祭の幹部を務めていた時に、私は第37回委員会のトップである執行部のお手伝いという形で、執行部に参加させていただきました。そして、先輩方の学園祭は大成功という形で終わりました。その学園祭を間近で見た私は、「果たして、私達にこんな素晴らしい学園祭が来年できるのだろうか」と不安に思いました。私達の学年は、失礼ではありますが決して一枚岩ではないと当時私は思っていたので、学園祭も中途半端に終わってしまうのではないかと危惧したからです。でも、そんな中、私は次の学園祭委員長に立候補いたしました。もちろん、そう簡単に立候補したわけではありませんでした。私は自分の人となりを理解しているつもりです。自分は不器用で、要領が悪く、頭も

弱いなど、人の上に立つべき人ではないと思っております。学園祭が終わった今でもこの考えは変わりません。また、実習などの班長ならともかく学園祭のトップという大役がこの私に務まるなんて到底無理だと思いました。前代の委員長に次の委員長よろしくなどと、お手伝いをしている時に言われていましたが、須く断っておりました。それでも、なぜ私が委員長という大役を務めようと思ったかという、1つ上の先輩方が達成した若鮎祭が素晴らしかったこと、そして、前代の執行部の若鮎祭を成功させようという努力を目の当たりにしたこと、さらに前代の委員長の強い説得があったことで、私は微力ながら若鮎祭に委員長という形で携わりたいと考えたための決断でした。それでも、不安は依然としてありました。

その後は、本当に大変な日々を過ごしました。私が委員長に就任いたしましたのが、今年の2月のことであり、2月から10月までの約9か月間（8月は全く仕事してなかったですが）、学園祭の成功のために尽





力してまいりました。2月には、各局の局長と副局長を探し、その後、医学科4回生と看護科2回生の局分けを行いました。3月には執行部で、今年の学園祭のメインテーマを決め、どんな学園祭にするか構成を練りました。今年のテーマは「I'm possible」ということで、不可能と訳される「impossible」にアポストロフィーを添えることで、文法的には間違っておりますが、私はできるという意味に捉えられ、不可能を可能にできるような学園祭にしたいと思い今回のテーマにしました。4月は新入生歓迎が忙しくなかなか活動することができませんでした。5月には活動拠点となるサークル連絡室の清掃や学園祭をどのようにしたいかという文書の作成を、6、7月には寄付金収集を行いました。そして、9、10月はほぼ毎日と言っていいほど、若鮎祭のことを考え、仕事を行っておりました。途中、心が折れそうになったことや、逃げ出したいようなこと、さらには、仕事でミスも多くしました。そんな時、私を支えてくれたのは、他でもない実行委員会のメンバーでした。私の心が折れそうになった時に、彼らは私の話を聞いてくれました。それだけで、私は胸が晴れ頑張ろうと思えました。ミスした時にも、優しく手伝ってくれました。今回、私が若

鮎祭実行委員長として成功することができたのは、何を隠そう実行委員会のメンバーに恵まれたからだと思います。最高のメンバーと最高の時間を過ごすことができました。将来、私が年老いても覚えているであろう医学生時代の素敵な思い出の一つになることでしょう。

最後となりましたが、馬場学長、服部副学長、柏木病院長をはじめとする大学、病院の教職員の皆様、永田学生生活支援部門長をはじめとする学生生活支援部門の先生方、湖医会をはじめとするOB,OGの皆様、学生支援係の栗本さん、若山さんをはじめとする学生課の皆様、後援会の方々、協賛くださった企業の皆様、若鮎祭に参加してくださった方々、私を委員長に推挙してくださった前代の織邊委員長、そしてなにより医学科4回生、看護科2回生の学祭に携わった皆さん本当にありがとうございました。

第38回若鮎祭は皆様のご理解、ご協力のおかげで無事成功を収めることができました。これからも続く若鮎祭がますます発展していきますようお願いながら私の文章を終えたいと思います。本当にありがとうございました。



「若鮎祭」実行委員の感想

会計 医学科第4学年 舟山 玲奈

今年も無事に若鮎祭を開催できたことを心よりうれしく思っています。

去年までの私は、学園祭のためにどれほど多くの時間と労力がかけられ、どれほど多くの方のご協力のもとで行われているのかほとんど知らずに過ごしていました。今回執行部に入って、初めて全体を見渡すことができました。医学科4回生と看護科2回生が中心となり、学校にいる全員が一丸となって若鮎祭を創りあげていく。滋賀医科大学というアットホームな大学だからこそできることだと実感しました。

執行部会計という仕事は、扱う金額はとても大きく、そして細かく、思っていた以上に大変でした。しかし終わってみれば、最高の仲間と若鮎祭を運営することができ、とても楽しかったという思いだけが残っています。

最後になりましたが、今回の若鮎祭開催のためにご協力くださった先生方や関係者の皆様、各局の会計のみなさん、本当にありがとうございました。

副委員長 医学科第4学年 池上 由希子

私は副委員長という立場で学園祭を運営することができ、本当に良い経験をさせて頂きました。

自分達の手で学園祭を運営するということは、素晴らしい学園祭にしたいという期待や楽しみと同時に、大きな責任を伴う立場でもありました。様々な不安はありましたが、振り返ってみると、本当に楽しかったと自信を持って言える学園祭でした。当日、多くの方に学園祭を楽しんで頂くことができ、その姿を見た時は胸が熱くなる思いでした。

不安を抱えつつも私が今回の若鮎祭を満喫することができたのは、頼もしい実行委員、そして医学科4回生や看護科2回生の仲間がいてくれたからだと思います。

最後になりましたが、学園祭を応援して頂いた皆様に感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

副委員長 医学科第4学年 大槻 晋士

今回の若鮎祭では副実行委員長の一人として、参加をさせていただきました。去年の若鮎祭で部活の先輩が同じ副実行委員長をされていて、とても大変そうだなと思って見ていたのが、まさか自分がこの役目を担うとは夢にも思っていませんでした。しかし岡野実行委員長のもと他4人の副実行委員長と会計からなる執行部と、各局局长と副局長を中心にこれだけの学園祭を作り上げることができたというのは、とても誇らしいことだと思っています。全体に関わるポジションにいたので、最初のテーマの決定から、各関係者への協力のお願いやステージ会社との交渉、物品の準備や縁日の企画といった各過程を全て見てこられたので、一つの学園祭が形作られていく様子を目の当たりにすることができてとても楽しかったです。本番はたったの2日間であつという間でしたが、この経験はかけがえのないもので、これからも活かされる貴重なものになったと思います。

副委員長 医学科第4学年 塚本 紗千

今年度の若鮎祭は「Impossible」というテーマに沿い、今までには無かった様々な新企画が数多く実現されました。学園祭は毎年開催されておりますが、今年は特に実行委員それぞれの個性が最大限に生かされ、例年に無いユニークな学園祭になったと感じております。企画や運営に参加して下さった滋賀医大生の皆さん、足を運んで下さった来客の皆様にとって思い出に残る二日間になっていましたら、実行委員の一人として幸いに思います。ありがとうございました。



副委員長 看護学科第2学年 石田 桂子

皆さん学園祭本当にお疲れ様でした。皆様のご協力により今年の学園祭も無事終了することができました。本当に有難うございました。私が学園祭を通して感じたのは、大きなことを成し遂げるためには沢山の小さな力が集まっていて、1つでも欠けたら成り立たないということです。私は今回副委員長と広告局という2つの仕事をさせて頂きました。一方は表に見える仕事、一方は裏で支える仕事と対照的でしたが、どちらも学園祭を作り上げるのには欠かせないものだと感じました。また、去年一回生の時は運営のことは何も知りませんでしたが、今年運営側にまわってみて去年もこうして先輩方が働いて下さったから開催することができたのだと知りました。そして、世の中の他のことも見えない所での誰かの働きがあるから成り立っているのだらうと思いました。こういうことに目を向けられただけでも自分なりの成長ができたかなと思います。本当に有難うございました。

副委員長 看護学科第2学年 山崎 美穂

私は、第38回若鮎祭で副実行委員長をさせて頂いた看護学科2回の山崎美穂です。

改めて振り返ってみると、本当に最高の学園祭でした！学園祭を作り上げていく前までは、医学科の4回生の先輩方と上手くやっていけるかとても不安でした。しかし、実際に一緒に作業をしていくにつれて、どの先輩もとても素晴らしい方々ばかりで、一緒に学園祭を作り上げていくことがとても楽しかったです！若鮎祭当日も「執行部を探せ！」という企画で、地域の人たちや滋賀医大の学生のみなさんとたくさん関わることができ、本当に楽しかったです。トラブルや大変なことたくさんあったけど、やはりみんなで協力して何かを作り上げることはとても楽しいし、そしてこのメンバーで実行委員をすることができて本当に良かったです。人間的にもとても成長することができました。そして感謝ばかりの若鮎祭でした。本当にありがとうございました。

ステージ局局長 医学科第4学年 三宅 佑

今年も第38回若鮎祭が無事開催され、皆様のご協力に心から感謝しております。若鮎祭の準備をしていくなかでステージ局員、他の局員の仲間と協力して今まで以上に絆を深めることができました。また当日ステージの企画が盛り上がっているのを見ると何とも言えない充実感を味わうことができました。僕はたいした仕事はできませんでしたが、執行部として学祭に携わることができ本当に貴重な体験をさせてもらいました。最後になりますが、来年の若鮎祭が今年以上に盛り上がることを期待しております。一緒に学祭を作り上げたみんなありがとう。

企画局局長 医学科第4学年 東岸 朋子

振り返ってみればあつという間の若鮎祭でした。

2月の終わりに実行委員会が発足し（私は企画局という部署でした）、皆で何をやるか案を出し合って、班に分かれて企画を練って...

企画書を書いたり、外部の方に依頼をしたり、宣伝したり、準備製作したり、運営の仕方など何度も何度も話し合ったり...

その間に容赦なく試験やレポート提出、部活動やバイトがあり、時間はあつという間に流れました。

そしていよいよ若鮎祭！

準備、当日、片づけ共、言葉通り全員が一丸となって動きました。素晴らしいチームワークでしたし、全ての企画が大成功だったと思います。本当に楽しかった！

また、若鮎祭で得たものは楽しい思い出だけではなくありません。普段の授業では見ることが出来ない皆の姿を見て、この大学の同回生や後輩が本当にいい人で、真に頼もしい仲間であると気づくことが出来ました。このことは私にとって（きっと皆さんにとっても）大きな財産だと思います。

最後になりましたが、若鮎祭の開催・運営に御協力いただいた皆様、有難うございました！



広報局局长 医学科第4学年 伊藤 史織

若鮎祭が終わって早くも二週間がたちました。いまあらためて、あの時間を振り返ってみると、如何に周りの人に恵まれ、助けられ、楽しい充実した時を過ごすことができたかをひしひしと感じ、このような機会を与えていただいたことに、ただただ感謝の気持ちしかありません。

思い起こせば、十ヶ月前、食堂で岡野委員長に局長をやってくれないかと頼まれたのが始まりでした。当時は体育会でも文化会でも責任ある職について、私にはとても無理なのではないかと悩んだりもしましたが、こんな機会は滅多にない、と思って引き受けて、本当によかったと思っています。自分にとって無理だと思っていたことが、達成できたのは、本当にたくさんの方の支えがあつてのことだと思います。

来年は後輩が取り組んでくれることと思います。彼らも私たちを超える素晴らしい経験を作りだしてくれることを楽しみにしています。

総務局局长 医学科第4学年 真田 悠希

私は総務局長として学園祭に関わらせていただきました。総務局の仕事は裏方のものが多かったですが、それでも物品、模擬店、衛生、駐車場関係のトラブル対応をさせていただき、少しは学園祭の運営に役立つことができたかなと思います。総務局の班長は皆さん協力的で、私が仕事を振るよりも前に率先して仕事をこなしてくださり本当に助かりました。また、社会経験の多い班長さんからは多くのことを学ばせていただきました。

若鮎祭は大成功だったと思います。私自身、学園祭の準備から当日までわたり、つらい時もありましたが、本当に楽しむことができました。実行委員長をはじめ、委員会や局員の皆さん、ご寄付を下された先生方、学生課の栗本さん、若山さん、そして学園祭に関わってくださった全ての皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

広告局局长 医学科第4学年 清水 聡一郎

若鮎祭では広告局長を務めさせて頂きました。今年も例年のように沢山の企業様、医療機関様から広告を頂くことが出来ました。瀬田、南草津など滋賀医大周辺の地域のみならず滋賀県内、また滋賀県外と様々な広告主様からご支援をして頂き、改めて若鮎祭は多くの方々によって支えられていることを実感しました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

自分も何か若鮎祭に貢献できればと思い引き受けた広告局長でしたが実際の仕事は予想していた以上に大変であり責任を伴う仕事でした。組織を動かすことの難しさを感じ、予定通りに事が進まず焦る事も何度もありました。しかし局員の皆さんからの助言や多くの協力によってこうして広告がパンフレットに無事掲載でき、局員全員に深く感謝をしています。自分自身にとってとても貴重な経験をさせて頂きました。ありがとうございました。



平成24年度 学生表彰

10月27日（土）、第38回若鮎祭開会式後に中庭水上特設ステージで、滋賀医科大学学生表彰の表彰式を挙行了しました。

今回、表彰を受けられたのは、平成23年9月から平成24年8月までの間に優れた実績、評価を得た7の個人及び団体です。また、博士課程の大学院学生によるポスター発表会の評価結果に基づく「優秀ポスター賞」の授与がこれに先立ち行われました。受賞者には馬場学長から表彰状と副賞の目録が授与されました。

受 賞 者	受 賞 理 由
ハンドボール部 生田 旭宏	第64回西日本医科学生総合体育大会 ハンドボール部門においてMVP賞(川上賞) に選出
ハンドボール部 上林 翔大	第64回西日本医科学生総合体育大会 ハンドボール部門 ベストキーパー賞（吉田杯）に選出
ハンドボール部	第64回西日本医科学生総合体育大会 優勝
ソフトボール部	西日本医科学生 夏季ソフトボール大会 優勝
医学科第4学年 羽間 悠祐	臨床検査医学講座にて研究に従事。 国際総合科学雑誌PLoS Oneに共同発表者の 第一著者として学術論文を完成させ、 医科学研究に貢献した。
陸上競技部 脇坂 穂高	第64回西日本医科学生総合体育大会 陸上競技部門 3000m障害競走 優勝
水泳部 高田 真央	第64回西日本医科学生総合体育大会 水泳競技部門 女子200m個人メドレー 優勝



第64回 西日本医科学生総合体育大会

今年度の西日本医科学生総合体育大会（通称：西医体）は岡山大学が主幹校として8月に開催されました。

今年度は優勝種目は少なかったものの、団体種目・個人種目とも8位以内の入賞が多く、総合成績は15位（全44校中）となりました。

クラブ名	種 目	成績（ベスト8以上）
ハンドボール部		優勝
ラグビー部		4位
準硬式野球部		ベスト8
男子バスケットボール部		ベスト8
柔道部	男子団体	4位
	女子個人	4位 2年 上村 真由佳
ボート部	団体	3位
	舵手付きフォア	2位
	ダブルスカル	2位
	シングルスカル	4位
陸上競技部	男子部門 総合	3位
	男子トラック部門	2位
	男子5000m	4位 3年 脇坂 穂高
	男子110mH	6位 4年 入山 圭司
	男子400mH	4位 2年 松浦 智史
	男子3000mSC	優勝 3年 脇坂 穂高
	男子4×400m	2位 大槻 晋士・木村 浩一朗・岡本 寛樹・松浦 智史
	男子 砲丸投	5位 3年 林谷 俊和
	男子 ハンマー投	6位 3年 林谷 俊和
	女子 やり投げ	3位 5年 堺 淑恵
水泳部	男子100mバタフライ	4位 3年 山本 大雅
	男子200m個人メドレー	6位 3年 山本 大雅
	男子200mリレー	6位
	女子 総合順位	4位
	女子200m 自由形	4位 3年 中西 真由子
	女子400m 自由形	5位 3年 中西 真由子
	女子100m 背泳ぎ	2位 6年 高田 真央
	女子200m	優勝 6年 高田 真央
	個人メドレーリレー	6位 2年 加藤 温奈
	女子200m リレー	5位
	女子400m リレー	4位
	女子200m メドレーリレー	4位

Library Book Bazaarを 開催しました！



第38回若鮎祭(10/27-28)において、図書館で不要になった資料を無料でお譲りするLibrary Book Bazaarを開催しました！

出展した資料の多くは医学系の専門書ですが、AERAやNewton、日経サイエンスなど読み物としても楽しめる雑誌もあり、本学の学生さんや教職員だけでなく、一般の方々にも興味を持ってもらえたようです。



初日は、開店早々に来訪される方が多数あり
早速、図書を吟味される
姿が見受けられました。

28日(日)はあいにくの雨模様でしたが、
若鮎祭のメインの日であるということもあって
各イベントの合間に多数の方が来館されました。



図書・雑誌を合わせて1,055点を出品し、2日間で
363点の資料が引き取られました!

あわせて、わかあゆ夢基金への協力をお願いしたところ

総額20,570円!

もの寄付をいただきました。
ご協力いただいた皆様、
本当にありがとうございました。



キャンパス ライフ

スチューデントドクター制度 について

スチューデントドクターとは、共用試験 CBT ならびに共用試験医学系 OSCE 試験に合格し、第4学年までの課程を修了した医学生を対象にしており、患者さんや地域社会に対して、たとえ医学生であっても「スチューデントドクター」であれば、一定レベルの知識と技量を獲得しているとの理解を図ることで、学生の医行為を大学（病院）が保証するものです。

滋賀医科大学スチューデントドクター認定式

3月14日（水）、平成24年度から新たに開始するスチューデントドクター制度の導入に伴い、医学科新第5年生95名を「滋賀医科大学スチューデントドクター」として認定しました。

認定式では、馬場学長から「医学生は患者さんから学び、信頼される医療人として成長する。その第一歩が臨床実習であり、自覚と心構えを再認識し、使命感・責任感、強い倫理観を持って臨んで欲しい。」と挨拶があり、学生代表へ認定証書の授与を行いました。それを受けて、学生代表から「自覚を持ち、責任と使命感を忘れることなく患者さんの立場に立って医療を学びます。」との決意表明がありました。

Student Doctor

スチューデントドクターシール



認定式の様子



学生代表へ認定証書が手渡されました

スチューデントドクターが国立病院機構滋賀病院で臨床実習を開始

今年度から、医学科第5学年の臨床実習施設として国立病院機構滋賀病院を加え、同院の総合内科学講座、総合外科学講座において臨床実習がスタートしました。

初日となった4月3日（火）には、臨床実習第1グループの5名が7時30分に大学に集合し、ジャンボタクシーで滋賀病院に向かい、玄関では来見教授と辻川教授の出迎えがありました。

早速全員白衣に着替え、スチューデントドクターとして総合内科のカンファレンスに参加し、終了後、個別の指導医に付いていよいよ2週間の実習がスタートしました。



国立病院機構滋賀病院外観

午後からは柏木病院長が国立病院機構滋賀病院を訪問し、初めての滋賀病院での臨床実習を視察後、指導医の先生方と懇談しました。地域医療における本学の臨床実習のより一層の充実が期待されます。



スタッフルーム



カンファレンスの様子



やる気いっぱいの学生達

総合外科学講座教授 来見 良誠

本年4月より、国立病院機構滋賀病院でスチューデントドクターの臨床実習を開始いたしました。大学からの送迎の時間があるため、実習は朝8時20分に開始し15時30分に終了するようにスケジュールを組んでいます。総合内科のカンファレンスでは、外来診療開始前に内科医師全員参加による症例検討会を行っています。9時から一人ひとり異なる診療科で実習を行っています。現在220床で、大学病院の約1／3の規模であるため、病院の各部署の機能を理解するのに適した施設と考えられます。

この実習によって、地域医療の実態と地域における中核病院の果たすべき役割や機能について理解が深まることを期待しています。

学生の感想

諸戸 るちあ

滋賀病院での2週間はスチューデントドクターとしての臨床実習生活のスタートに相応しい、刺激的で、学習意欲のそそられるものでした。班員が一人ひとり異なる科に振り分けられ、それぞれの科においてマンツーマン以上の熱く丁寧な指導を受けられるというシステムがとてもよかったです。身体診察の様子や、内視鏡などの手技、手術を非常によい位置から見学させて頂くことができました。また、当初予定されていなかったにもかかわらず、私たちの希望を聞き入れ実現してくださった「当直実習」では、のちに経験する大学病院での当直実習と異なった雰囲気の中一夜を過ごすことができ、非常に貴重で、よい経験ができたと感じております。

学生の感想

合田 敏章

滋賀病院は大学病院に比べてcommon diseaseが多く、また、八日市という土地柄高齢者が多いため、私たちの多くが将来勤務するであろう地域の基幹病院での業務をイメージしやすく、将来のキャリアパスや目指す医師像などについて、より具体的に考える良いきっかけとなりました。比較的規模が小さく、診療科間の垣根が低いため、様々な診療科の先生のお話を気軽に伺える雰囲気があったことも非常に良かったです。朝のカンファレンスでは各診療科の多様な専門分野を持つ先生方が一同に集まり、救急症例や入院症例について様々な観点から議論するとともに、私たちスチューデントドクターに対してもわかりやすく解説などを加えてくださり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

海外自主研修

自主研修を終えて

医学科第4学年 真田 悠希

私は2012年8月24日から9月17日まで約3週間、カナダのブリティッシュコロンビア大学付属St.Paul Hospital内にあるUBC iCapture centreというところで研修を受けてきました。私がこの研修先を選んだ理由は三つあります。一つは研修を、ネイティブの英語で受けたいと考えたことです。将来医師としてどのような形で働くにしても医学英語は必要なので、自主研修を通じて医学英語を学びたいと考えていましたが、せっかくなので発音も綺麗で語彙力もあるネイティブの先生から研修を受けたいと考えました。二つ目は、この研修先が病院と隣接している研究所であるということです。病院と隣接していれば、研究だけでなく臨床現場や、臨床に関連した講義も聞くことができるだろうと考えました。三つ目は、ホームステイができるということです。ホームステイをすれば研修中だけでなくそのあとの時間もできるだけ英語を使う環境にいろことができると考えました。

研修内容はどれも興味深いものばかりでした。研究所内には多くの実験室があり、ウエスタンブロッティング、細胞培養、ケモタキシスアッセイ、動物実験、平滑筋の収縮力測定、共焦点顕微鏡、DC protein assayといった手技を見せていただき、ウエスタンブロッティングについては実



毎朝乗ったsky trainの駅にて

際に手伝いをさせていただきました。大学の実習講義で習った手技のほかにもこれほど多くの手技があるということに驚きました。また、それぞれの研究室で行っている研究の内容についても説明していただきました。これらの研究が将来的に論文となって発表され、今の医学の進歩につながると思うと心が躍る気持ちでした。

今回の自主研修は基礎医学研究が主でしたが、海外での臨床現場や臨床系講義も体験したいと考え、先生方をお願いしたところ、ICUの回診の見学やRounds（回診や勉強会といった意味がある）に参加させていただくことができました。ICUの回診では、先生方がそれぞれ担当する患者さんの病歴についてプレゼンテーションを行う様子を見ることができました。まるでアメリカの某医学系ドラマを見ているかのようでした。Roundsの中には最新の臨床医学研究の発表、日本でいうケースカンファレンスのようなものなどがありました。医学英語だけでなく医学の知識の向上にもつながり、非常に有意義でした。

研修で疲れきった脳を癒してくれるのが観光でした。研修のない日には街の中心部から少し離れたStanley parkやEnglish bay、またRichmondという中国人が多く住む街を訪れました。また、ホストファミリーにWhistlerやVictoriaといった観光名所にも連れて行ってもらいました。どこへ



Whistlerの山をリフトに乗って下っています



研究所でお世話になった先生方と
マレーシア料理店にて



ヴィクトリアにあるButchart garden。
色とりどりの花があります。

行っても日本では見られないような広大な景色が広がっており、カナダという国の大きさ、また自然の豊かさを感じました。またバンクーバーは国際的な都市ということもあり様々な国の料理の店がありました。研究所は街の中心部にあったので、研修中の昼食や研修後の軽食として様々な国の料理を食べることができました。

ホストファミリーは、とても気さくで楽しい家族でした。夕飯時には会話が絶えず、またその内容も面白く、夕飯がいつも楽しみでした。また、夕飯後には一緒にテレビを見たり、音楽に合わせて一緒に踊ったりと、とても楽しい時間を過ごしました。また、中国とフランスからの留学生も来ており、カナダだけでなく中国やフランスの言葉や文化も学ぶことができました。

自主研修で外国人の先生や日本人の先生からお話を聞く中で、研究というものの大変さ、そしてやりがいについて考える機会を頂くことができました。研究においては思ったような実験結果が得られないことは多くあり、それにめげない忍耐強さや信念が必要だということを学びま

した。その分思ような実験結果が得られたときは非常に強い達成感を得られるということも学びました。実際私を指導して下さった研究所の先生の一人は、今行っている研究が順調に進んでおり、今年の11月ごろには論文を発表できるだろうと嬉しそうに話してくださいました。研究には苦勞がつきものですが、その分得られるものは計り知れないと思いました。また、例えば自分の研究自体が何か目に見えてわかる大きな結果を出さなくても、自分の研究によって他の人の研究が上手くいくことがあるということも学びました。研究とは、世界中の研究者同士の相互恩恵によって成り立っており、つまりは世界中の研究者によってなされるチームプレーなのだと思います。このことはカナダという、世界中から研究者の集まる環境で自主研修を受けたからこそ感じる事ができたと思います。この自主研修に参加するにあたってお忙しい中ご協力くださった呼吸器内科学講座の中野恭幸先生、また学内実習でお世話になった相見先生、iCapture centreの方々、ホストファミリー、3週間一緒に研修を受けた阿古目さん、そして研修に関わってくださった全ての方々に感謝します。



バンクーバーオリンピックの行われた
Whistlerにて



ホストファミリーと一緒に

海外自主研修 in Kenya

医学科第4学年 谷村 真依

私は今夏、3週間ケニアに行ってきました。なぜケニアに行こうと思ったかと言うと、私は国境なき医師団になりたくて医学部に入ったので、発展途上国の医療を直接学ぶ貴重な機会ということで決心しました。というより、ケニアに行けるので滋賀医科大学を受験しました。

ケニアはイギリスの植民地であったので、子供でも英語・スワヒリ語を話します。どの施設に行っても英語で話してもらえるので、なんとか理解できました。フランス語とかじゃなくて本当によかったです。ケニアはまだ建国して49年。まだまだ若い国で、医療体制・保険制度・上下水道・電気など全てにおいて学んでいる途中と感じました。毎日19時をすぎると停電が起こります。夜は日中とは比べ物にならないほど治安が悪くなります。道路もコンクリートの所は少なく、大半がデコボコです。そして、何よりも目についたのは、かなりの数の建設中のビル。途中で辞めになる事が多いそうです。道端にはゴミがたくさんあったり、スーパーには警察が警備をしている。

そういう所だけれど、人間性はとても明るいです。道を歩いていると「ジャンボ!」と言ってあいさつしてくれます。そして握手をされ、たまにハグする人も。スラムでは子供達が「How are you?」と連呼して、体に触ってきては逃げる。アイドルになった気分でした。抱っこをせがまれたり、手をつながれたり。日本ではあり得ない事を経験できました!

研修施設としては、ナイロビ大学・Mbita District Hospital(ビクトリア湖畔のニャンザという街)を主に訪れました。この2つの施設では、ケニアの医療に触れました。ナイロビ大学内のケニヤッタ国際病院はケニア内でもとても大きな病院。Mbita District Hospitalは地方の小さな



City Cotton スラムの学校の子供達と

病院。この大小2つの病院で研修させていただく事で、ケニアの医療について少し知る事ができたと思います。

日本と大きく違うのは、医師(Medical Doctor)が国内に600人程度しかおらず、その代わりにClinical Officerと呼ばれる職業の人がたくさんいるという事。この人たちは大きな手術以外の医療行為を行います。ナイロビ大学ではケニアの医学生と一緒に医師について病棟をまわりましたが、とても優秀かつ熱心であるという印象を受けました。その優秀な医学生は医師になるとヨーロッパなどに行ってしまうそうです。

さらに、ケニアでは医師は雲の上の存在であるということ。外来を見ていると、患者さんはほとんどしゃべりませんでした。聞かれたことにだけ答える、そんな感じでした。

他には、孤児院・NGO団体の施設・世界第2の大きさのスラム・ケニア最高の研究所なども見学させていただきました。あとは、野生動物を真近で見られるマサイマラ国立保護区・本来なら500万羽くらいで湖を覆い尽くすフラミンゴがいるナクル公園・マサイマーケットにも行ってケニアを満喫させていただきました。

私がこの研修を終えて一番心に残っていることは、スラムにいる子供達の笑顔でした。お金がなく、一日にたった一食しか食べることでできない子供達。毎日毎日兄弟の世話をし、親の手伝いをする子供達。その子供達の笑顔はすごく輝いていました。Child Doctorスタッフの宮田さんがおっしゃった「この子供達にとって幸せとは何か、何がこの子供達をこんな素敵な笑顔にしているのか、考えて接してみてください」という



ケニアの夕暮れ

言葉がすごく心に残っています。お金がないけど、一人一人が必要とされている、家族の愛を感じることができる、そのような事が彼らを笑顔にしているのではないかと。私たちはご飯を3食食べることができて、大学に通う事ができている。それなのにあんな素敵な笑顔はもっていません。ケニアの医療機関を訪問し研修することで多くのことを学べましたが、私は医者になるにあたって医学的知識以外に、すごく大きな、人間として大切なことを子供達の笑顔から学べたのではないかと思います。

今年は治安が例年より悪くケニアに行くには

かなりの覚悟がいりましたが、絶対に生きて帰りましようと言ってくださり、ケニアでの研修先との連絡・段取り、行く前の病院研修など全てを準備してくださった血液内科の木藤先生、一緒に3週間を過ごし支えてくれた同回生4人、ケニア行きをOKしてくださった滋賀医大の先生方、家族には本当に感謝しています。ありがとうございました。

後輩の皆さんは4回生になったらぜひ、自主研修先にケニアを選んでください。すごく楽しいし、なんか自分がちっぽけに思えます！！

ありがとうございました。



写真に興味津々の子供達



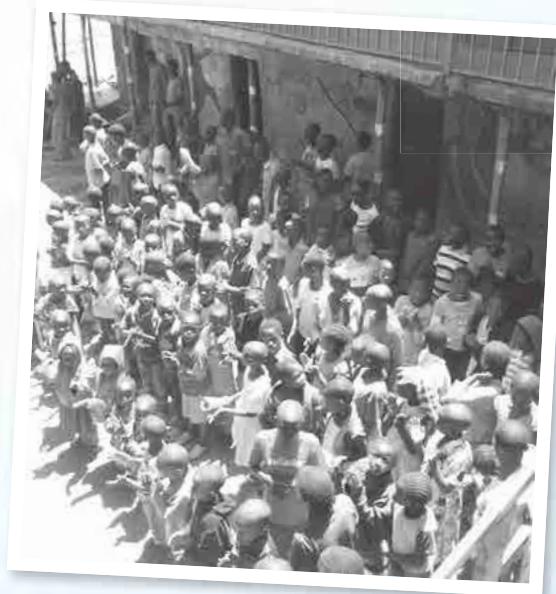
サファリにいる
野生のライオン



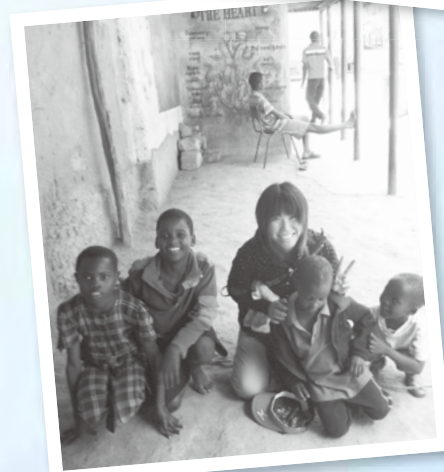
研修先の Mbita District Hospital



高台からキベラ
スラムを一望



出迎えてくれたマゴソスクールの子供達



スラム内のマゴソスクールの子供たちと

アメリカでの自主研修で学んだこと

医学科第4学年 藤原 慎二

今年の夏、僕は海外自主研修で Baltimore にある Johns Hopkins University (JHU) の精神科の神谷先生の研究室に行き、約一ヶ月間の研修プログラムに参加させていただきました。Baltimore は、ワシントンDCの北東約64キロに位置し、港町、スポーツの街として知られています。特に観光の名所で多くの観光客で賑わうインナーハーバーでは、僕も休日に訪れ、楽しい時間を過ごすことができました。

僕が自主研修先にアメリカのJHUを選んだのには二つの理由があります。一つには僕自身が精神科に興味があって精神疾患の研究では世界的に有名なJHUを実際にこの目で見てみたいということ、そしてもう一つには、アメリカ人の物の考え方や価値観に触れることで自分自身が精神的に成長できるのではないかと考えていたからです。

アメリカに行く前には、同級生の黄君に英語を教してもらったり、英語のCDを聞いてリスニングの勉強をしたりとある程度の前準備をしたつもりですが、向こうの大学とのやり取りやビザ申請などの渡米前の諸々の手続きに手間取ったり、西医体前のラグビーの練習や西医体で忙しかったりと、準備不足のままアメリカに旅立ちました。

アメリカに着いてから一番困ったことはやはり英語です。アメリカに入国する際、入国管理官の英語がほとんど聞き取れずにいきなり自信を喪失しました。着いてから最初は、御飯を買いに行く時にもレジの人の英語が聞き取れず、冷や汗ダラダラで恥をかきつつ買い物をしていました。



神谷先生とJHU Hospitalで

ボルチモアに着いて二日目からJHUでの研修が始まりました。神谷先生はちょうど日本に出張されていたので、神谷ラボのポスドクの齋藤淳先生と技師のMichaelが僕を迎えに来てくれました。こうして僕のJHUでの自主研修が始まったのですが、JHUの精神科のラボには、日本人の先生が多くコミュニケーションに困ることはほとんどありませんでした。また、Michaelは僕と話すとき、Hodge先生のように聞き取りやすい英語を話してくれたので本当に助かりました。

神谷ラボでは統合失調症に関わる原因遺伝子DISC1という遺伝子の機能を解明すべく、子宮内電気穿孔法という手技を用いて、ある発現ベクターを動物個体の特定の場所に導入し、その発現の調節による脳の発達の変化を調べるという実験を行っていました。僕のラボでの仕事は、齋藤先生の実験助手をしたり、Michaelと一緒に実験用のマウスの管理をしたりすることでした。Michaelは僕に、電気泳動の仕方や、アガロースゲルの作り方、マウスの脳の抽出の仕方を親切に教えてくれました。最初の頃は、専門用語の英



Michaelと研究室で



JHU正面玄関のキリスト像



ラボの若手と一緒に



齋藤先生と
Baltimore Granprix
観戦

単語が分からず、電子辞書を持ち歩きながらの会話でした。Michaelは、本当に良い奴で、精神科のラボの若手の飲み会に誘ってくれるなど、いろいろと世話をしてくれました。また、彼とは実験後に大学の学生寮の近くにあるCooley Centerという体育館で一緒にウェイトトレーニングをしたりと本当に仲良くなりました。

また、休日には齋藤先生がボルチモア市街をレース会場とするインディカーレースのグランプリに連れて行ってくれたり、Hampden Festというお祭りに誘っていただいたり、いろいろとBaltimoreを案内していただきました。また、齋藤先生にはボルチモアの日本人研究者の飲み会にも誘っていただき、たくさんの方々とは知り合うきっかけを作っていただきました。

そして、研修期間中にブラジルのサンパウロ大学からサバティカルでJHUの神谷ラボに研修で来られたMirian Hayashi先生とも面識を得ました。Mirian先生は、日系人で日本語も堪能で、医学部の教授なのに、とてもフレンドリーでユニークな方でした。Mirian先生から実験の指導を受ける機会があったのですが、実験中はとても厳しく、おかげでpipetting操作がとても向上しました。実験の時は、とても厳しかったMirian先生ですが、プライベートの時はとても優しくブラジル風の焼肉店に連れて行ってくれたりと色々と面倒を見ていただきました。

そして、アメリカ滞在の最後の一週間は、一緒にJHUに行っていた関くんとNYとワシントンDCに観光に行きました。この頃になると、日常会話程度の英語ならば不自由なくなり、アメリカに来てよかったなと痛感しました。

今回の渡米は僕にとって初めての海外旅行だったのですが、本当にたくさんのことを学びました。その中で、僕が学んだ最も大切なことは「全てのことにに対して積極的であれ」ということ

です。アメリカという様々な人種が共存する社会では、自己主張のない人間は何も手にすることができません。だから、今回の自主研修で、自分のやりたいこと、目的とすることをはっきりと主張することができたのは、僕の中で大きな収穫となりました。

最後になりますが、僕が今回の自主研修で有意義な時間を過ごすことができたのは、神谷先生をはじめたくさんの方々のおかげで、感謝の気持ちでいっぱいです。JHUで自主研修を考えていらっしゃる方がいれば、とても素晴らしい経験ができると思うので、是非行ってみてください。



Mirian先生と研究室で



関くんとNYの
エンパイアステートビルで

ミシガン州立大学連合との交流協定に基づく研修に参加して

看護学科第4学年 市川 瑞希

私は今回の海外研修でミシガン州にある Saginaw Valley State University に行かせていただきました。この大学内にある College of Health and Human Services を拠点として Saginaw のなかの様々な病院や介護施設に行きました。研修内容としては訪問先の施設見学、治療方法や看護活動内容についての講義、ソーシャルワーカーの仕事内容、実際の地域での住民の方とボランティアスタッフの方の活動の様子を見学させていただきました。私は研修に行くまでは海外の看護師はどのようなことを重視し、活動しているのかをあまり詳しく知りませんでしたが、今回の研修でより良い看護とは何かを常に考えることが大切だと学ぶことができました。この他にもシステムの違いや病院の機能についても学びました。

まず病院で学んだことは、手術などの治療を受ける急性期の場合と慢性的に治療を続けながら生活する場がはっきりと分けられているということです。

日本の病院でも地域の診療所やかかりつけの医師からの紹介で大きな病院で手術などの高度な医療を受けるというアメリカの病院の機能に似た点は多いのですが、日本では初診を含む外来と入院、手術施設が同じところにあります。

アメリカでは手術を行う大きな病院では外来は受け付けておらず、ホームドクターという地域に近い家庭医が初診を行う仕組みになっていました。これにより治療が終わったら地域に返すという仕組みがより徹底されていると感じました。



家族待機室：手術、分娩、入院の付き添いといった家族のために広々とした空間が病院内に準備されている。



ER：救急搬送されたその場で処置が可能。設備は日本と同じだが部屋の数はアメリカが多い。

日本では皆保険制度といわれているようにほとんどの人が治療費の補助を受けて医療を受けられる仕組みが整っています。しかしアメリカでは所得の少ない人は最新の治療を受けられないのではないかと考えていました。実際は低所得の方も利用できるように寄付金やボランティアによって低金額で診察を受けられる病院もあることを知りました。

日本でも治療を受ける患者の家族の付き添いを認めていますが相部屋の場合だと家族は病室の狭い空間で生活しなければなりません。アメリカでは遠方にすんでいる家族のためにホテルよりも格安で泊まることのできるような家も用意されていました。大学で家族看護について学びましたが、患者さん本人だけでなくその家族のことも考えるという点はアメリカも日本も同じでした。

日本とアメリカの看護師の行為そのものについても大きな違いがあり、看護師が働く環境についてもシステムが異なっていました。日本ではナースプラクティショナーを導入しようかと



内服時計：患者さんが投与／内服を忘れないように。



研修先のDr

自宅模型：患者さんの退院後の生活を考えながら関わるのが大切。



いう段階ですがアメリカではそれよりもさらに医師に近いような任務を担う看護師も活動されていました。

看護師は専門性がとても高く、日本で広がっている専門看護師や認定看護師以上に細かく分類されていました。たとえば褥瘡を専門にしておられた看護師の方は体位変換、使用するガーゼや薬のことについて具体的な処置が可能です。担当の医師も協力して行っておられる様子は日本と同じです。しかし看護師の医療行為として行えることが多い分、より看護師の専門性を発揮していると感じました。

病棟の様子は看護師が巡回しながらその場で収集したバイタルなどの情報を入力できるようにパソコンをカートに乗せながら動くこと、患者さんが内服の自己管理で飲み忘れがないように予定時刻を時計の模型を用いて表すといった工夫は日本と同じでした。心臓の手術を受けた患者さんが退院後の生活でどのようなことに注意すればいいのかということを学ぶ教室もありました。看護の質の向上やQOLの向上に向けた看護師の役割は同じだと感じ、実際に看護師として働く際にもより良い看護とは何かを常に考えていこうと思います。

ソーシャルワーカーの方にお話を伺った際に

地域と病院の連携の際の役割だけでなく、地域に住んでいる人の健康に対する取り組みも重要だと知りました。スーパークitchenという取り組みを実際にされている場に見学に行かせていただきました。スーパークitchenというのは無償で食事を提供しているコミュニティです。食費がなくなる月末に利用する人が多く、子連れの家族もいました。ここで提供された食事を家に持って帰る人もいと知りました。食費がないことで家に引きこもって満足な食事をとれないよりも、この場に参加することで他の人とのコミュニケーションが生まれ、その場での友人ができ、あたたかな食事をとることができます。現在、直接ソーシャルワーカーは関わっていませんが地域に必要な支援内容を考え、継続して実施できるようサポートすることの大切さを感じました。

研修では大学の先生や関係者の方を始め、研修先でお世話になった様々な施設、Saginaw Valley State Universityの先生にご尽力いただき多くのことを学ぶことができました。とても感謝しています。今回の研修で学んだことや感じたことを多くの人に伝えていきたいと思います。また学んだことを活かし将来どのような働き方をしようか自分の中でしっかりと考えながら残りの学生生活を過ごしていきたいと思っています。



スーパークitchen食料庫：

ボランティア先から集められた食料が集まってくる。



提供される食事の例

平成24年度滋賀医科大学奨学金奨学生の決定

本学では、毎年、医学科2年～6年、看護学科の2年～4年の各学年から、成績が優秀な者1名を奨学生として採用し、奨学金月額5万円を1年間給付しています。

平成24年度の奨学生は以下のとおり決定し、平成24年7月25日にクリエイティブモチベーションセンター CMC ホールにおいて授与式を行いました。

平成24年度奨学生

医学科第2学年	金 尾 亮
医学科第3学年	沖 達 也
医学科第4学年	田 村 亮 太
医学科第5学年	合 田 敏 章

医学科第6学年	竹 内 誠 人
看護学科第2学年	鷲 田 奈 緒
看護学科第3学年	緒 方 梨 乃
看護学科第4学年	安 永 瞳



奨学生からのひとこと

●医学科第2学年 金尾 亮

滋賀医科大学に入学できただけでも幸運だと思っていたのですが、今回奨学生として認めていただけて感無量です。これも私一人の力でなしえたことではなく、滋賀医科大学で出会うことができたかけがえのない周りの皆さまからのサポートがあったからだと思います。この場を借りて感謝の意を伝えます。ありがとうございました。滋賀医科大学へ入学することができて本当に良かったです。

来年、再来年と続けて奨学生として認めて頂けるよう日々精進する思いです。これからも切磋琢磨するよき友として、時にはライバルとして頑張っていきたいと思います。

●医学科第3学年 沖 達也

この度は、平成24年度の滋賀医科大学奨学金奨学生に選んで頂き、まことにありがとうございます。このような名誉ある奨学生に選んでいただき、大変光栄に思います。さて、この奨学金制度についてですが、勿論奨学金制度のためだけではないものの、奨学生に選んでいただくことを1つの目標とすることで、勉学に対するモチベーションを保つ手助けとなり、より一層勉学に励むことが出来ました。思い返せば、昨年度、解剖などのハードスケジュールを乗り切れた要因の一つには、この奨学金制度があったように感じております。

今後も、滋賀医科大学奨学金奨学生の名に恥じぬよう、日々精進していきたいと思っています。この度は本当にありがとうございました。

●医学科第4学年 田村 亮太

自分の将来の目標に向かって努力していく中で、それを評価していただき、奨学生に選んでいただけたことを大変うれしく思います。このように勉強してこられたのは滋賀医大の先生や家族、友人の支えがあったからだと思ひますし、そのことに感謝しています。

今後は実習などで患者さんに接する機会も出てくると思うので、講義でしっかり知識を身につけて患者さんの役に立てるように、よりいっそう努力していきたいと思ひます。

●医学科第5学年 合田 敏章

この度、本奨学金の奨学生に選ばれたことを大変光栄に思います。同時にこれまでお世話になってきました先生方や職員の皆様、勉強の機会を与えてくださった患者様等に深く感謝いたします。

今後とも精一杯努力を続け、地域社会に貢献できるような医師になりたいと考えております。

●医学科第6学年 竹内 誠人

小学生の頃から学士編入生となった現在までの長い学生生活を振り返ってみても、このような栄誉を頂いた経験は初めてで、自分が本当に選ばれたのか未だ信じられず思わず頬を抓りたい気持ちとなっております。

5年生のポリクリという臨床現場に最も近い環境における学習姿勢を評価されたことは将来への大きな励みとなり、これを機に良医・名医となるべく努力をより一層重ねてゆきたいと思ひます。

滋賀医科大学奨学金奨学生に選んで頂ける機会を与えてくださった方々、そしていつも私を傍で支えてくれている家族に今一度心から感謝いたします。

●看護学科第2学年 鷲田 奈緒

この度、奨学生に選んで頂いたことを大変光栄に思ひます。

このように勉学に励むことができたのは、指導して下さった先生方や周りの仲間たち、そして家族のおかげであり、とても感謝しています。

奨学生の名に恥じぬよう、これからも努力していきたいと思ひております。ありがとうございました。

●看護学科第3学年 緒方 梨乃

この度は、奨学金奨学生に選んでいただき、大変光栄に思ひております。

お話をいただいた際は、驚きのほうが大きく戸惑いましたが、支えてくださっている先生方や友人、応援してくれている家族のおかげだと、改めて恵まれた環境であることを感じる事ができました。

9月からは臨地実習も始まり新しい経験をさせていたかくので、気を引き締めて今後も一層の努力を重ねたいと思ひます。

●看護学科第4学年 安永 瞳

この度、思いがけず奨学生として選ばれたことを、驚きとともに大変光栄に思ひます。

滋賀医科大学に入学して以来、三年余り、先生方から貴重な講義を受けながら、友人達と切磋琢磨して勉学に励んでまいりました。また、実習中に受け持たせていただいた患者様はじめ、ご指導いただいた病院関係者様、看護学科の先生方、そして友人の支えがあり今回のような学習の成果に結びついたのだと思ひます。

学生生活も残りわずかとなりましたが、今後は周囲からの信頼に値するような看護師となるべく、慢心することなく、滋賀医科大学の奨学生の名に恥じぬよう、向上心を持って努力していきたいと思ひます。ありがとうございました。

ヨット部による追悼慰霊式

本学ヨット部は、去る平成4年9月11日（金）午後4時50分に琵琶湖で不幸にも遭難した故嶋岡秀典さんの慰霊式を、9月9日（日）の11時からクリエイティブモチベーションセンターで行いました。

嶋岡さんの御家族、馬場学長、ヨット部顧問の藤山内科学講座教授、ヨット部OBといった関係者約40名の列席があり、大学関係者の追悼の言葉が述べられた後、ヨット部主将の医学科3年 九住龍介君から、部活の安全対策に対する誓いの言葉がありました。



2012年 嶋岡さん追悼慰霊式

医学科第3学年 ヨット部主将 九住 龍介

今年であの悲しい事故から20年もの年月が経ちました。毎年9月にこの嶋岡秀典さんの慰霊式の日を迎えますと、私は安全対策の重要性、そして大自然の恐ろしさを改めて実感致します。

秋に代替わりを致しまして、昨年までとは異なり、私は現役部員総勢15名を束ねる主将としてこの慰霊式を迎えております。主将という立場は、部員のかげがえのない命を預かり、そして絶対に守っていかなければならないという責任があります。その為には自分自身の技術と知識を全力で磨くことはもちろん、事故を未然に防ぐためには自分たちに何ができるのかを考え、実践しなければなりません。そして、今現在大きなトラブルもなく練習ができる環境に恵まれていることへの心よりの感謝の気持ちを忘れてはなりません。この慰霊式を通して、主将としてそのことを改めて深く考えさせられます。

今年度は3カ月の謹慎期間の後の活動再開ということもあり、私も含めてまだまだ技術的には未熟な部分が多いことと思います。しかし、だからといって焦燥感に駆られ、安全対策を疎かにするというのはあってはならないことでもあります。もちろん、技術の向上が安全な練習に繋がるというのは明白です。そして何よりも、何故あの悲しい事故が起きてしまったのかということと、嶋岡秀典さんと家族の方々のご意志、そしてヨット部の先輩方が築き上げてきた安全対策についての知識と伝統をしっかりと理解・実践し、後輩たちに漏れなく教え伝えていくことが我々ヨット部員の責務であります。

最後になりましたが、嶋岡秀典さんの安らかなご冥福を、心よりお祈り申し上げさせていただきます。



馬場学長による追悼の言葉



列席者による献花

新任教員 紹介

生命科学講座 (生物学)



教授

平 田 多佳子

平成 24 年 6 月 1 日付で、生命科学講座（生物学）教授を拝命いたしました。その重責に身の引き締まる思いを強くしております。

私は京都大学医学部を卒業した後、附属病院および大津赤十字病院で内科研修を行いました。その中で、当時特に治療の難しかった血液疾患の原因を明らかにしたいという思いから、大学院では血液内科学を専攻し、出血性疾患の遺伝子解析を行いました。幸い見いだした遺伝子変異によって、それまで原因不明であった疾患の病因を明らかにすることができ、「複雑な病態を単純な原理で説明できる」魅力を感じたことが、基礎研究の道に進む転機となりました。留学先の米国タフツ大学およびハーバード大学では、血液・免疫系の細胞の生体内動態に興味をもち、その分子機構の解析を行いました。帰国後は大阪大学で細胞動態に関わる接着分子、糖転移酵素、脂質メディエーターなどについて幅広く研究を進めてきました。また、平成 21 年からは京

都大学で免疫関連難病の創薬プロジェクトに参加し、医薬品開発の視点から疾患の病態や治療を考える機会を得ました。これまで臨床医、基礎研究者、創薬研究者といういくつかの立場から生命科学に携わってきたことは、幅広い視点で生命科学や医学を考えるための貴重な経験となっています。

生物学は、医学部に入学した学生が最初に学ぶ生命科学科目の一つです。最初に「学びかた」をきちんと身につけることが、「科学としての医学」を学ぶ上で非常に重要であると考えております。この点に配慮して、生命に対する探究心や科学的・論理的思考力を十分養い、専門科目の履修に不可欠な生物学の知識の土台を初年次にしっかり築けるように、生物学教育を充実させていきたいと考えております。また、私自身が魅力ある研究を行うことで、研究の面白さと重要性をこれからの医学・医療を担う世代に伝えていきたいと思っております。

滋賀は、母の実家があるので小さい頃からよく訪れている土地ですが、本学に着任して、日々変化するその山並みと緑の美しさに魅了されています。着任に際し、前任地の先生から「Give it all you've got」と励ましの言葉を頂戴しました。これまで臨床と研究を通して学んだこと、身につけたこと、やりとげたこと、苦労したこと、失敗したこと、すべての経験を活かして、教育・研究の両面で充実した新しい教室を作り、本学の発展に少しでも貢献できるように努めていきたいと思っております。何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

経 歴

1987 年 3 月 京都大学医学部医学科卒業
1995 年 3 月 京都大学博士（医学）
1995 年 4 月 日本学術振興会特別研究員
1996 年 6 月 米国タフツ大学医学部 リサーチフェロー
1997 年 12 月 米国ハーバード大学医学部 リサーチフェロー
2000 年 4 月 同 インストラクター

2001 年 10 月 大阪大学大学院医学系研究科 研究員
2002 年 4 月 同 助手
2004 年 4 月 大阪大学微生物病研究所 特任助教授
2009 年 4 月 京都大学大学院医学研究科 特定准教授
2012 年 6 月 滋賀医科大学生命科学講座（生物学）教授

解剖学講座 (生体機能形態学)



准 教 授

岡 野 純 子

平成24年7月1日付けで、解剖学講座生体機能形態学部門の准教授に就任致しました。以前大津赤十字病院で臨床医として勤務しておりましたのと、古くは遡って医学生時代、バドミントン部の試合で滋賀医科大学にはしばしば訪れました。従って着任初日、体育館を見て非常に懐かしかったです。という訳で勝手ながら滋賀にはご縁を感じております。

私は京都大学医学部を卒業後、なんの迷いもなく最も「臨床的な」形成外科に入局し、6年後専門医を取得しました。入学当時は「形成外科」なるものも知りませんでした。ポリクリの時に講義にいらっしゃった女性の先生が「形成外科はみんなを幸せにする科です」と仰って、頬部の血管腫を切除して植皮を施行された男性の写真を見せて下さいました。その男性は、物心ついた時から血管腫を非常に気にされていたようですが、周囲の「男性なんだから気にするのはおかしい」等の発言によって、気に病むことさえ許さ

れなかったそうです。植皮をされて人生が楽しくなった、晴れ晴れしたと非常に喜ばれて、それが形成外科の醍醐味だと先生が仰り、進路は他科を考えていたものの、どうにもその話が忘れられず、結局形成外科を選択しました。

色々勉強させて頂きましたが、臨床だけでは判らないことも多く、大学院に進学し、発生／解剖の教室に所属しました。それまで臨床しかしたことのない者にとって、研究は考え方、アプローチもまるで異なり、最初は面白くなかったのですが、卒業する頃にはもう少し勉強したいとの気持ちが大きくなりました。主人が米国国立衛生研究所に留学を決めた際、job openingsを探まくって、インタビューを受けて同じ時期に留学できたのは幸運でした。京大では顎顔面の発生をテーマにしておりましたが、米国では皮膚および付属器の発生を勉強しました。どちらも形成外科関連の分野ですので、私の中では仲良く共存しています。

このたび、滋賀医科大学で解剖の教室に所属する機会を頂きましたので、今までの純粋な基礎研究から、臨床応用を視野に入れた研究をしたいと思っております。また、解剖は医学教育の最初の大きな関門で、臨床医になってからも一生勉強する分野です。医学生の皆さんにとって、最初の糸口を良いものとするように少しでもお手伝いができますよう、精進したいと思っております。

教員としても研究者としても駆け出しですが、何とぞご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

経 歴

1996年 3月 京都大学医学部 卒業
1996年 5月 京都大学医学部附属病院（形成外科研修医）
1997年 5月 大津赤十字病院
1999年 4月 帝京大学附属病院救急救命センター 助手
2000年 4月 大阪赤十字病院形成外科
2002年 4月 京都大学大学院医学研究科博士課程 入学
2006年 3月 同 修了 医学博士

2006年 4月 京都大学大学院医学研究科附属先天異常標本解析センター研究機関研究員
2006年 10月 京都大学大学院医学研究科生体構造医学講座形態形成機構学助教
2008年 8月 米国国立衛生研究所 留学
2012年 7月 滋賀医科大学 解剖学講座生体構造形態学部門 准教授

医療文化学講座 (哲学)



教授
室寺 義仁

2012年9月1日付けで、医学科・医療文化学講座(哲学)の教授として着任致しました室寺(むろじ)義仁です。皆様、どうか宜しくお願ひ申し上げます。

ハンブルク留学中の出来事でした。日本では昭和から平成の世に移り代わり、ドイツではベルリンの壁が崩壊しました。1989年11月9日の深夜近く、ハンブルク空港から市内に向かう幹線道路にほど近いアパート地階(1階)で暮らしていた私たち(妻と日本から連れ立って来たメス猫)は、クラクションの喧騒に驚きました。外に出てみると、列をなす車の屋根をドイツ国旗が波打って流れていました。東ベルリンから車を飛ばしてきた人々へのハンブルク市民の歓迎の風景でした。“Unglaublich aber Wirklich,”これがニュースキャスターの第一声でした。それから早、23年という年月が経ちました。このリアルタイムの時代にはまだ産声を上げていなかった世代への、特に医療人を目指して学ぶ学生たちに向けての教養教育の現場に立つことになりました。

「いのち」をどのように生かし、そして、「いのち」をどのように「こころ」と、医療の未来に繋いで行くことができるのかという課題を、教育・

研究・大学運営の場で考えて行きたいと思ひます。ここで言う「いのち」とは、私が今生きている行為、そして、未来に向かって生きて行こうとする行為の源底にある生命力。「こころ」とは、私の生存において、今瞬時の存在、そして未来の存在へと、一瞬一瞬の存在を作り為している行為。このように私は仏教哲学的な観点に立って考えています。この意味で、医師にとっては、亡くなる他者の「いのち」を、我が「こころ」に繋いで行くことも大切なはずと思ひます。

昨年2011年は、3月11日に東日本大震災が発生し、併せて、福島原子力発電所の事故から始まる放射能汚染の問題が広まった年です。自然の力の前には無力で、不条理な死や苦しみを受けねばならない、そのような自然の一部でもある生き物の在り方を見つめて、医療も含めた人力の限りを尽くしても、それでもなお、明るく希望ある未来を作り為して行くための哲学が、今求められているように思ひます。また、昨年11月には、オウム事件(1995年発生)に係わるすべての裁判が結審しました。この事件には、医学・理工系の若き優秀な頭脳が連座しました。宗教の持つ危険な側面が、公の学校教育の場で教えられてこなかったことが原因の一つであると考えられています。哲学は真偽を疑うことから始まります。宗教は真偽の価値判断を下すことから始まります。そこで、哲学の教育の場では、人として・医師としての在り方・生き方を自ら考え深めて行けるよう、真理であると思ひ込まれている見解や信念に対しても、疑いを持って思索を繰り返して行けるよう、出来る限り、対話形式の授業を展開して行きたいと思ひます。例えば、そもそも、人が自然な死を迎えるとは、尊厳をもって死ぬるとは、一体、どのようなことであるのか、その時、どのような事態が本人や周囲にとって起こるのかも含め、考えて行きたいと思ひます。死を迎えることを意識した本人に対して、言わば魂の叫びであるスピリチュアル・ペインに配慮した緩和医療もまた、今強く求められていると思ひます。

経歴

1981年 3月 高野山大学文学部 卒業
1981年 4月 京都大学大学院文学研究科宗教学専攻
仏教学専攻分科修士課程入学
1983年 3月 同 修了
1983年 4月 京都大学大学院文学研究科宗教学専攻
仏教学専攻分科博士後期課程入学
1986年 3月 同 修了
1986年 4月 京都大学文学部・文部教官(助手)

1988年 10月 ハンブルク大学インド・チベット歴史文化研究所
のオリエント学専攻
古代中世インド言語文化専攻分科博士課程に
DAAD(ドイツ学術交流会)奨学生として入学
1992年 3月 同博士課程、公開口頭試問試験合格、修了
1992年 4月 高野山大学文学部仏教学科 専任講師
1996年 4月 同 助教授
2003年 4月 同 教授
2012年 9月 滋賀医科大学医学部医学科医療文化学講座
(哲学)・教授

国立病院機構
滋賀病院だより

滋賀病院の中核診療科として



国立病院機構滋賀病院
呼吸器外科医長

尾崎 良智

(医学科15期生・平成7年卒)

私が所属する呼吸器外科は、戦前の旧陸軍病院を母体とした国立八日市病院が平成12年12月に国立比良病院と統合し国立滋賀病院として改組されたと同時に新設されました。現院長である井上修平先生が立ち上げ、次第に地域の医療機関の信頼を得て順調に症例数を増やしてきました。しかしながら平成16年の新臨床研修システム導入後、全国的に医師の偏在が顕著化し、私が赴任した平成20年4月には大量の医師離職の憂き目にあい、内科診療科は殆どなくなり、一部の病棟は閉鎖を余儀なくされました。一方で医療圏内に呼吸器専門科を標榜する病院が殆どないこともあり、病院全体の入院患者が激減する

なか、当科では内科・外科系問わず積極的に呼吸器疾患患者の受け入れを行い、一時は入院患者の8から9割が呼吸器外科の患者という状況で、まさに病院の屋台骨を支えてきました。

その後東近江の地域医療再生計画が始動し、滋賀医大の寄附講座から医師派遣が確保され、病院は再び息を吹き返し順調に医師数が増加、診療科も充実されるようになりました。現在では東近江地域の急性期医療・二次救急を担う地域の中核病院として再生しつつあります。かつての苦しい病院の状況を知るものとしては感慨深いものがあります。

当科の2011年の年間入院件数は499件で、病院の中核診療科として今も重責を担っています。現在呼吸器外科では院長はじめ4名の医師で診療を行っていますが、少ない医師数で数多くの症例をこなすにあたってはやはり、他診療科の先生方やコメディカル・パラメディカルの方達の協力なくしては成り立ちません。その点、当院は医局内でも気軽に相談でき、看護師始め、薬剤師、検査技師、栄養士のみなさんが協力的で各部





門との連携が非常にスムーズです。大病院ではできない小回りの効く診療が行え、これは小所帯であるがゆえのメリットとも言えるでしょう。

また2011年の年間手術件数は155件で、主な疾患では原発性肺癌32件、転移性肺腫瘍8件、気胸43件、肺抗酸菌症7件、膿胸9件、胸部外傷3件などとなっています。呼吸器内科の常勤医が1名ということもあり、診断から治療まで一貫した診療が行われています。局所麻酔下胸腔鏡や超音波気管支内視鏡検査など大学でも殆ど行われていない検査手技も数多くこなしており、その診療内容は大学に決してひけをとらないレベルであると自負しております。

当院は結核病床を有していることもあり、抗

酸菌症をはじめとした感染症の手術が多いのが特色です。感染症の手術は呼吸器外科手術のなかでも難易度が高いものが多く、術前・術後管理を含め、まさに経験がモノをいうのですが、当科では適応症例については積極的に施行しており実績を上げています。また最近では救急患者の増加により胸部外傷症例も増えており、修練医の先生にとっては非常に幅広く呼吸器外科疾患の経験を積むことができるようになっております。平成25年春の新病棟落成によりハード面での充実も期待され、滋賀病院はさらに魅力的な病院に生まれ変わろうとしています。呼吸器疾患を学ぼうと志す若い先生方、ぜひ呼吸器外科に研修に来てください！

平成25年4月には、新病棟が名神高速道路の横に大きく現れます。



インフォメーション

平成24年度第1回学位授与式



■課程博士 5名



■論文博士 3名



■修士 1名



平成24年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに 平成24年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式

去る10月1日（月）10時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。



告 辞

学 長 馬 場 忠 雄

台風17号の影響を危惧しておりましたが、滋賀にはほとんど大きな被害をもたらすことなく過ぎ去り、予定通り晴天のもとで入学式を挙行できますことをお慶び申し上げます。

本日、平成24年度滋賀医科大学医学科第2年次後期学士編入学および秋季大学院医学系研究科入学宣誓式を挙行できますことは、本学教職員と在学生にとって大きな喜びであります。

学士編入学の17名の皆様滋賀医科大学入学おめでとうございます。本日のよき日を迎えたのは、今までの経験を医学の道に生かし、医学研究や医療において大いに活躍したいという「高い志」をもって、不断の努力を重ねてこられた結果であります。そして、その「高い志」を理解し、経済的にも精神的にもサポートされた御家族はじめ関係各位の励ましと協力の賜物と思います。改めて皆様方に感謝し、それに報いるべく、本学において「高い志」を達成するため一層自分自身を磨いてください。

本学は、1974年10月1日に創立され、今年で39年目となります。現在まで医学科卒業生は3,100名を数え、その内1,067名、約34%が本県の医療に従事する一方、卒業生の42名が国公立大学の教授として教育研究に、また専門領域の学会においても多くの者が活躍し、地域やわが国の医療に貢献しています。学士編入学は、平成12年に定員5名で始まり、以降10名、15名、さらに17名と増加してきました。その目的は、学士編入学者が他分野で学んだ知識や技術、あるいは社会人としての経験を医学・医療の場で生かし、医学・医療の発展に寄与することにあります。入学者は、大学卒以上の学歴の持ち主で、その道においても活躍が期待された方ばかりで、この優秀な人たちが「人」に魅せられ、本学において、生命の営みに対して、今までの知識や技を生かし、形態から機能、あるいは基礎から臨床に至る

領域で、新しい息吹を吹き込むことに期待をしています。

そして、医学を学び、研究や臨床あるいは地域医療に貢献しようとする熱い情熱を持って入学された皆様に対して、本学の教職員は勿論のこと、地域の方々も支援を惜しまないと思います。

10月1日は、本学の創立記念日にあたることを述べましたが、本学の創立にご尽力いただき、その後も引き続き学外有識者会議の顧問としてご指導いただいた岡本道雄先生が、本年7月24日、98歳でご逝去されました。岡本先生は、本学に対し熱心に医学教育や医の倫理に関する有るべき姿を熱っぽく語っていただいたのが強く印象に残っています。著書「人生はわからない—90歳にして語る医療と生き方」の中で岡本先生は、病床で研修医に接して哲学をやってほしいと強く感じられたのであります。研修医は、何年間か学んできた医学医療の知識をもって現実の患者を初めて診るが、まず、患者を診察、そしてその所見に対する学んできた知識を整理し、それらをもとにした処置、すなわち医学技術を行う研修医の目的はそこにあると承知しているが、患者は心のある人間である。病気だけでなく、病んでいる人間に対する考えは十分できているのか？1991年第23回日本医学会総会の会頭を務めたが、その時、作家司馬遼太郎、老荘思想研究の大家、福永光司氏は、3,000人の医師の前で「この中の一人でも医師として哲学をやってほしい」と力説された。学問をやる者として、欧米では、当然の古典、プラトン、アリストテレスの初歩でも知ってほしい。研究者になるつもりはなくても、哲学的見識は医師のレベルをなすものである。ヒポクラテスは、「医師にして哲学を知り語るものは神に近し」といっています。すなわち、病気を診る前に患者、患者の心を診てほしいということです。

本学の医学教育の基本は、「地域基盤型教育 (Society-based Education)」であり、地域のボランティアの方々に、生活面から教育や診療に至るまで幅広く関与し、支援いただいております。教育では知識 (Science) と技能 (Arts) の基本を教授し、研究と診療に役立てると共に、生命に対する倫理感 (Ethics) を養うことを目指し、4学年のカリキュラムにも「医の倫理」を入れています。一般社会の人々の目線で医学・医療を感じとることを身につけて下さい。

ところで今、ご承知のように地域医療の再構築に対応して、滋賀県は奨学金を貸与する地域枠を設けています。学士編入学では、2名を用意していますので、これらを活用していただければ幸いです。地域医療再生計画のもとに、平成22年4月には、国立病院機構滋賀病院に「総合内科学講座」と「総合外科学講座」を開講し、学生や研修医の総合医としての教育の場としています。

診療に携わるにしても、研究の道に進んでも医学・医療の世界は大変厳しいものがあります。診療においては、患者が主体で7時間45分の労働時間で済むものではなく、日夜勤務時間にとられない状況です。医学部を目指された原点は、高収入、高い地位、安定した職業ということではなく、病に悩む人に対して少しでも手をさしのべ、役に立ちたいという「高い志」であると思います。苦しい、厳しい状況におかれても課題を真正面から受け止め、100%努力することで、自分自身が心から満足できる達成感が得られるものと確信します。

初心を忘れることなく、「高い志」を持ち続け、信頼される医療人として本学で成長され、地域にあるいは世界にその成果を還元してくれることを祈念しています。

平成24年度秋季大学院医学系研究科博士課程入学者8名、修士課程入学者6名の皆様、ご入学誠におめでとうございます。秋入学については、平成20年度に文部科学省より補助金を得て、大学の国際化を目指し、調査を行ってまいりました。外国からの入学生を迎えるのには、秋入学が適

しているのも、最近、東京大学は学部生の入学について、国際化に対応して秋入学を積極的に取り入れ、海外から優秀な学生を迎える方向で検討しています。小中高校の教育システムにも影響し、また、医師国家試験など社会制度の変革が必要です。本学では、平成22年度から秋入学を大学院に取り入れています。また、社会人入学制度や、医学研究コースの他に高度専門医コースも平成22年度から導入しております。

大学の国際化は秋入学制度ではなく、大学院教育における英語による講義、演習、また、論文作成に必要な知識と操作技術の習得など留学生に対応した実質化が求められています。

大学院の使命は、独創的な研究の芽をつかみ、それを伸ばすことであります。研究は、絶えず try and error で、高い壁に立ち向かってそれを乗り越えてはじめて独創的な成果が得られます。高度専門医コースは、基礎的な実験だけでなく、臨床研究の積み重ねを数編の論文にまとめ、新しい臨床知見を見い出すと共に、専門医の取得を目指した臨床実績を評価の対象としております。いずれのコースについても「温故知新」を忘れずに、自分の研究分野の文献を詳しく調べ、得られた実験データについて、指導者や同僚との議論を経て、さらに自分の工夫を加え、新しい知見をつけ加え、少しでも医療の道に生かせる努力をして下さい。

滋賀県は日本の中央に位置し、人口増加県であり、琵琶湖を囲んで自然環境に恵まれ、東京、京都、奈良に次いで旧所名跡も多く存在しています。勉強や研究の合間に訪れて、楽しい充実した学生生活をエンジョイして下さい。

以上、告辞いたします。

最後に、皆様もご存知のように、メディアで報道されましたわが校の不祥事を今後二度と起こさないように、社会から負託された本学の使命を遂行するよう研鑽しなければなりません。

平成24年10月1日



後期学士編入学



■後期学士編入学 17名

平成24年度秋季入学者



■博士課程入学 8名

■修士課程入学 6名

第38回 解剖体慰霊式

去る10月25日(木)午前10時から本学体育館において、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員及び教職員・学生約600名の参列の中、厳かに第38回滋賀医科大学解剖体慰霊式を執り行いました。

このたびは、系統解剖59霊、病理解剖28霊、法理解剖78霊、計165霊を新たにお祀りし御霊のご冥福をお祈りしました。

慰霊式は、出席者全員で御霊に黙祷を捧げ、諸霊芳名拝誦、馬場学長及び学生代表による慰霊の辞、高橋しゃくなげ会理事長の献辞、出席者全員による献花が行われました。

最後に、ご遺族代表のご挨拶及び、本学教授代表として社会医学講座の西教授から挨拶があり、厳かな内に閉式となりました。



会場の様子



馬場学長による慰霊の辞



出席者全員による献花が行われました



SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
勢多だより
DECEMBER 20, 2012

編集後記

先日吉本興業のイベント担当係の方と話した際に、「今年は吉本のコンビを学祭に呼んで頂きました。売れているコンビだったので、大勢が詰めかけるといった混乱を避けるために、実行委員会では直前まで出演を伏せていたそうです。」と聞きました。こうしたひとつひとつの判断や行動に、地域や他者への思いやりが表れるのだと思います。学祭の成功を願い大きなイベントを企画しながらも周辺地域の方々への配慮を忘れずにいてくれたことを頼もしく思うと同時に、学生の皆さんにとっての学祭は楽しい行事であるだけでなく様々な学びの機会であることを再認識しました。

編集委員長 宮松 直美

(勢多だよりの由来)

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢(いきおい)が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということと、瀬田とせず、あえて勢多とした。

(題字は、故 脇坂行一初代学長による)

勢多だより No. 94
発行年月日：平成24年12月20日
編集：「勢多だより」編集担当者会議
発行：滋賀医科大学広報委員会



滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動－これは人々の医への期待である。外に向
かって中心から一隅を照らす光の波動－これは人々の期待に返す答えである。」